

# 「ケータイ小説コンテスト」実施報告

岡本 佐智子 神谷 忠孝

## 1. 「ケータイ小説コンテスト」実施にあたって

北海道文教大学外国語学部日本語学科では、2005年8月から9月にかけて「第1回ケータイ小説コンテスト」を実施した。同コンテストは携帯電話の電子メールを使って600字から800字以内の短い小説を書き、その作品を競うものである。

このコンテストの実施目的は、日本語雑学ブームが続くなか、日本語「ウンチク」に留まらず、その語彙知識を実際に使い、日本語文章表現を練習する機会の提供にある。

日本語学科では、「日本語文章表現法」をはじめ、自分を伝えるための「自己表現Ⅰ」、小説を創作する「クリエイティブライティング」科目等を開講しており、正しい日本語文章作成の基礎知識を再確認することから、日本語で効果的に発信できる文章能力の育成を目指してきている。文章表現は多くの書物に触れて語彙を増やすことも大切であるが、どれだけ多くの文章を書くかが表現力向上への近道でもあろう。

しかし、受講学生にとっては、原稿用紙、あるいはワープロに向かって文章を作成する時間が限られていたり、与えられた課題に受身姿勢であったりしたため、もっと身近に日本語文章力を鍛え、自ら日本語で発信できる基礎訓練の機会を増やせないものかと考えていた。

そこで、授業以外にも気軽に日本語文章表現練習ができる方法として、多くの学生が所有する携帯電話の電子メールに注目した。すでに本学科生と教員のやりとりにはパソコンの電子メール以外にも、携帯電話メールが定着しており、そのメール文章は一度に全角で5,000字が送信可能なため、レポート提出を携帯電話から送信する者も出ていた。

学生にとって、携帯電話の電子メール交換は頻度の高いコミュニケーション媒体となっていることから、こうした日常生活に密着したコミュニケーション媒体を日本語文章練習に活用すべく「ケータイ小説コンテスト」が企画された。

携帯電話の電子メール（以下、ケータイメールと呼ぶ）を使った小説コンテストは、すでに小学館<sup>1</sup>が2004年から「携帯メール小説大賞」を募集していたが、主に小説家志望者を対象としており、一般的ではなかった。また、国内の携帯電話の普及率は約70%<sup>2</sup>に達していることから、学内だけでなく、地域市民にも日本語文章作成機会を提供したいと考え、広く一般の人々からの作品も受け付けることにした。

同時に、ケータイメールで頻繁に使用されている絵文字・記号文字の使用を禁じた。これは携帯電話の機種によって正しく受信できないこともあったが、むしろ非言語メッセー

ジを言語で描写することは、曖昧な感覚に頼らず、具体的な文章表現の練習ができると考えたためである。また、ケータイメールでは、話しことばと書きことばが混用されがちであるが、小説であれば、話しことばと書きことばを使い分ける意識化も図れると期待した。

応募規定の 600 字から 800 字以内というのは、原稿用紙 2 枚分に相当し、ストーリーを十分に練らなければ伝達力が弱くなる。つまり構成力の訓練ができると考えた。

こうして「ケータイ小説コンテスト」は、日本語文章を楽しみながら作成してみよう、親指から自分の世界を発信してみよう、といった主催者側の思いを託して実施された。

## 2. 「ケータイ小説コンテスト」実施結果

同日本語学科主催の「ケータイ小説コンテスト」は、高校生部門と一般部門の 2 部門を設け、応募受付は 2005 年 8 月 1 日から 9 月 10 日までの約 40 日間とした。この間、北海道新聞、朝日新聞等をはじめメディア<sup>3</sup>で、商業ベースではなく「大学」が主催する「ケータイ」コンテストとして話題を集めた。このため、小説愛好会ホームページ、ブログ等にも同コンテストがリンク紹介されるなどして、同コンテスト実行委員会への応募問い合わせメールは 80 通余りにも及んだ。問い合わせ内容の多くから、小説コンテストどころか、コンテスト自体に応募することも未経験であることが伺えた。その一方で、このコンテストが携帯電話使用のマナー悪化を助長するものである、といった非難の内容も 4 通あったことを記しておく。

応募総数は 926 作品<sup>4</sup>（内、高校生部門 205 作品、一般部門 721 作品）に及び、大手出版社主催のコンテスト応募者数をはるかに超える数となった。

応募者の年齢は、14 歳から 71 歳までの広がりを見せ、携帯電話使用者の年齢層が拡大していることを実感させられた。

審査にあたっては、選考委員長の本学神谷忠孝を中心に、選考委員が 9 月 20 日から 3 日間に渡って査読を行い、25 日の最終審査会をもって以下の入賞作品<sup>5</sup>に決定した。

北海道文教大学学長賞（高校生部門より最優秀作品 1 編）：

阿部梨香子氏（18 歳 高校 3 年生 札幌市）の作品「人色」

北海道文学館理事長賞（一般部門より最優秀賞 1 編）：

青木典仁氏（28 歳 無職 砂川市）の作品「鯛の会」

北海道文教大学日本語学科賞（各部門より優秀作品各 2 編）

・高校生部門より

堺若菜氏（17 歳 高校 3 年生 札幌市）の作品「rainbow」

高木英輔氏（16 歳 高校 2 年生 名古屋市）の作品「わたし色のキャンバス」

・一般部門より

久保田秀幸氏（35 歳 会社員 札幌市）の作品「3 minutes」

川俣チヨ氏 (63歳 無職 留萌市) の作品「貴方へ」

上記入賞者には 2005 年 10 月 8 日に北海道文教大学外国語学部のオープンキャンパス会場において授賞式を行った。その他、K D D I 賞、参加賞当選者については本学日本語学科ホームページをご覧いただきたい。

### 3. 「ケータイ小説コンテスト」選考経過

筆者、神谷は十数年にわたり、文芸評論家として北海道各地から出版された同人雑誌の創作を読んで優秀作品を選ぶ仕事をした経験がある(「北海道新聞」1978～1991)。現在は北海道文学館の理事長も務めている。

このたび、「ケータイ小説コンテスト」審査委員長という立場から応募作品を読んだ。一日に7時間かけて3日間ほどかかったが退屈することはなかった。それぞれに工夫をこらして独自性を表出しようとする熱意が伝わってきた。

作品に優劣をつける作業はつらいものだが、一応の基準として次のように考えた。

- (1) 文章がしっかりしていて、主題がユニークである。
- (2) 起承転結の構成力。
- (3) 800字という字数を有効に使っているかどうか。
- (4) 社会性。
- (5) 読後感の印象。

以上のような基準に基づいて高校生、一般人からそれぞれ10編ぐらいを選び、他の教員の選考作品と重複しているものを優先的に最終候補とし、賞の決定は協議するというかたちで進行した。

一人で20編ぐらい応募した人、入賞は望まず自分の考えを伝えたいだけの人、はじめて創作に挑戦した人などさまざまであった。プロを目指す人もいた。知人とのメール交換だけで満足できない人が増えているように感じた。また、中学生の応募があったことは、若い人たちのなかに表現意欲が芽生えつつあることが予感される。

### 4. 「ケータイ小説コンテスト」応募者背景

高校生部門では、全体の7割強が女子で占められ、5割弱が高校3年生の投稿であった。その他の一般部門では、職種が多様であったが、大学生と社員が突出しており、それぞれ約21%、18%を占め、世代別では20代が42%、30代が19%となった。一般部門全体の性別では女性が約58.7%、男性が41.2%で、主婦層が女性比率を押し上げる結果となった。

コンテストの応募要領は、プライバシー保護の観点から、氏名(ペンネーム可)、年齢、職業または学年のみを記載することとした。住所記載を要求しなかったため、応募者の明確な居住地は不明であるが、参加賞の発送および自発的な記載により判明した住所を見る

限りでは、北海道を中心に、岩手県から宮崎県等に至るまで 23 都府県に渡っていたことがわかった。

また、残念ながら、年齢、職業等、応募要項のすべてを記入をしていない者が 1 割強もいた。一般部門応募者の職業は記載されたものだけで見ると、会社員が 28.3%、専門学校生、大学院生を含む学生 18.1%、主婦が 15%、アルバイトまたはフリーターが 13.4%と続く。また中学生も 5.2%の応募があった。

図 1 応募者の職業

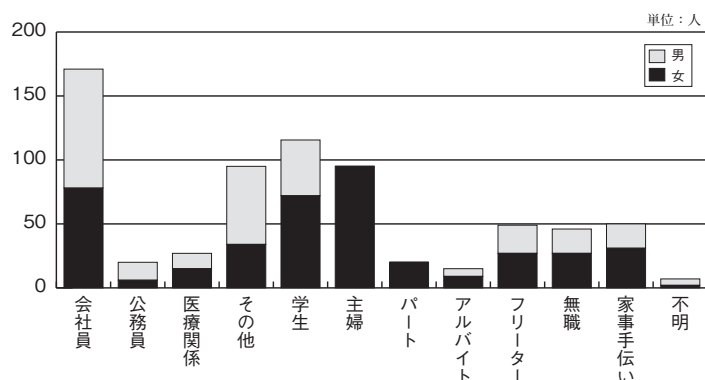


表 1 に分類した職業項目には、応募者自らの職種表記が様々であったため、「会社員」には工場経営者、出版社、自動車販売、ソフトウェア開発、電車運転士、航空機メンテナンス、警備員も含めた。また「医療関係」には看護師、介護士、整体師、手技療法士等が、「その他」には自営業、自由業、酪農業、建設業、リサイクル業、新聞配達、デザイナー、保育士、俳優、声優、美容師、デザイナー、ラジオパーソナリティー、コピーライター、ミュージシャン、脚本家等が含まれている。

表 1 職業・年齢別応募者のプロフィール

	中学生	高校生	学生	会社員	公務員	医療関係	自営業	その他	主婦	パート	アルバイト	フリーター	無職	家事手伝い	職業不明
14～15歳	33	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
16～17歳	0	108	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0
18～19歳	0	91	27	6	2	0	0	0	0	3	3	14	3	0	0
20～24歳	0	0	81	29	3	10	1	10	2	7	7	25	20	4	0
25～29歳	0	0	4	33	4	5	1	12	11	2	2	21	5	2	1
30～34歳	0	0	1	44	4	9	4	2	8	2	2	1	5	2	0
35～39歳	0	0	0	33	2	1	2	8	4	0	0	1	1	1	2
40～44歳	0	0	0	17	2	0	1	21	14	5	5	0	5	0	0
45～49歳	0	0	0	2	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	1
50～54歳	0	0	0	2	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0
55～59歳	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	5	0	0
60～64歳	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0
65～69歳	0	0	0	0	0	0	0	4	0	0	0	0	0	0	0
70～74歳	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
年齢不明	0	6	1	1	1	0	1	1	54	1	1	1	1	0	30
計(人)	33	205	114	172	18	26	10	60	95	20	20	64	46	9	34

高校生の年齢については、学年別の記載を求めたため、便宜上、高校 1 年、2 年生を 16 歳から 17 歳とし、高校 3 年生を 18 歳に分類した。

なお、「アルバイト」か「フリーター」かは、投稿者の記載に従った。

コンテスト終了後にも多数の問い合わせが続き、なかには応募した作品は既に自費出版済みであること、他のコンテストに同じ作品を応募していること等を告げて来る者など、投稿規定違反ではあるが、応募した作品への自信が高かったことが伺えた。

投稿の送信時間は、高校生は 21 時台が約 16.6%と最も多く、以下 15 時台 8%、23 時台、19 時台が続くが、全時間帯にわたって送信されていた。また他の職業に従事する者も送信時間は一様ではなかったが、「会社員」および「公務員」は特定の時間に集中しており、職業の特徴が確認できた。会社員の送信時間は余暇の時間と思われる 22 時から午前 0 時台が約 4 割で、昼休み時間帯の 12 時から 13 時台が 2 割、退社時間または帰宅途上時間の 18 時から 19 時台が 2 割で、午後 8 時台、9 時台に若干名の投稿が見られたものの、午前 3 時台から 9 時までは一件もなかった。

投稿に添えられた文章には、今仕事が終わったばかりであることや、帰宅途上であること、恋人と海に来ている、今の生活を変えたい、明日試験がある、初めてメールを送る、等々が記されており、携帯電話が生活に密着していることを垣間見ることができた。

同時にケータイメールであれば、施行錯誤しながら文章を作成する練習がどこへでも「携帯」できることを再認した。

## 5. 「ケータイ小説コンテスト」を終えて

昨今、現代の日本人は限られた表現使用で、語彙が少ないと言われているが、それは表面的なものに過ぎないことが確認できた。特に副詞にいたっては実に多様な表現が駆使されていた。また、ワープロ文章によく見られる過剰な漢字変換も少なく、ケータイメール特有のひらがな表記多用の傾向も見られなかった。10 代から 20 代に多用されるであろうと予測していたカタカナ語使用の頻度も至って低く、伝えるためのことば選びを重ねた成果と推測している。

こうしたことから、主催した日本語学科「ケータイ小説コンテスト」実行委員会では、本来の実施目的とした、日常生活で気軽に日本語文章練習の機会を提供することに成功したと考えている。また予想を大きく上回る応募数から、携帯電話に付帯する電子メールをはじめとする機能を学習に活用する方法は未知数であると感じている。

日本語学科では、すでに留学生の日本語教育ではケータイメールで日本語作文の添削返信することを、課外学習活動の一つとして活用している。しかし、このような日本語運用に関わる支援を、大量のメールが送信されるコンテストに対応するには人的限界を感じざるをえない。

特にケータイメールという携帯電話のパーソナルな伝達媒体は、個人的な繋がりが強いためか、投稿した者からの受信確認要求も過半数を占め、一度問い合わせに返答すると親しげな反応が寄せられ、主催者側を当惑させた。特に「ケータイ」ならではの迅速性を求

める投稿者が多く、実行委員が通常業務の合間を縫っての対応では不満の声が届いたため、休日返上にまで至った。

本来は「第2回」を実施する予定であったが、コンテスト運営には本務を持つ人員では限界があることから、次回開催を断念せざるをえないことを報告しておく。未だコンテスト実施継続希望メールが届いているがご理解いただきたい。

また、本コンテスト入賞者に大手出版社からの出版企画が申し込まれていることも記しておく。

## 付記

日本語学科主催の「ケータイ小説コンテスト」実施にあたり、協賛の快諾だけでなく、コンテスト実施を応援してくださった KDDI 株式会社 au 北海道支社、白戸剛士支社長はじめ、木戸口郁城氏、島尚之氏に、この場を借りて心からお礼を申し上げたい。

また集英社『週刊プレイボーイ』（2005年11月22日号）で、本コンテストが称賛されたことを嬉しく思う次第である。

なによりも、このコンテストに応募してくださった方々に、実行委員を代表して謝辞を述べさせていただく。

## 注

1. 『『きらら』 + 『The News』 携帯メール小説大賞募集』『きらら Qui! La! La!』2005年5月号によると、「月刊賞」と、さらに月刊賞の中から半年に一度「グランプリ」を選出している。また応募規定には、字数を500字から1000字と指定されている。p.64参照。
2. 総務省2004年4月28日発表によると、携帯電話・PHS加入者数は、3月末時点の契約者総数が8665万8645人で、人口普及率では67.9%になったとしている。さらに、日本総研2005年9月発表では、同年7月末現在の携帯電話加入者数は約8854万で、人口普及率は69%に達したことが報告されている。携帯電話の普及率は2000年以降、伸び悩みの感があったが、携帯電話事業者等の第三世代携帯の普及活動や高齢者層の利用者獲得が展開されているため、加入者数および人口普及率が若干広がることが予想される。
3. 「北海道新聞」2005年6月29日付け、「朝日新聞」7月31日付け、札幌圏タウン誌「おしゃべりBOX」8月5日号参照。また、同年6月29日、30日には北海道内ラジオ局の数番組で当「ケータイ小説コンテスト」の話題が取り上げられたとのエアチェック報を受けている。
4. パソコンからの投稿8作品は本コンテストの応募規定に準じていないことから無効と

した。

5. 各部門の最優秀作品および優秀作品は以下の通りである。

【北海道文教大学学長賞受賞 高校生部門より 阿部梨香子氏の作品「人色」】

街を歩くと皆それぞれ色を持っていて、この人は好きな歌手色に染められているんだとか、あの人は趣味のサーフィン色に染められているんだとか分かってしまう。それぞれの持つ色は歩いている途中でふと変わったり、会話をしている人と同調して同じになったりする。まさしく、色は心を映し出すんだ。

なのに…、僕には色がない。自分には見えないだけかと思って、友達に聞いたけど無色だと言われた。毎日を何と無く生きてるから色がないのだろうか…？ 好き嫌いばかりしているから色がないのだろうか…？ 小さい頃はあったのだろうか…？ 僕はもうわけが分からない。自分の色だけないなんて…。友達と話していても、会話が素通りするように色も通り抜けていくし、何かを始めてもそれ色に染められたりしない。

そんなある日、僕は無色だと掲示板に書き込んだ。するとAから、何色にも染まりたくない透明なのかもねと言われた。透明は色なのだろうか？ と返事を書いた。だけどその日、答えは無かった。次の日もその次の日もまた、答えは無かった。結局僕は自分が何色なのかも、どうして周りの色に染められないのかも、それが良いのか悪いのかも分からないままだった。

また、僕は街を歩き始めた。やっぱり皆色を持っている。色を持っている人はよく笑っている。彼色に染められている彼女も、彼女色に染められている彼も。僕は憂鬱で仕方がないと思いながら空を見上げた。空は青く広がっていたけど、僕の手が届く範囲の空に色は無かった。色のないものがあるのが嬉しかった。

夕方になると高い所にある空は真っ赤に染められたけど、手の届く範囲の空は何も変わらないままで、周りの誰もそんなことを気にしている人はいなかった。僕は自分の色を探すことに捕われていたんだと思った。ありのままでもいい。透明だって色がなくなっても、僕であることに変わりはないんだから…。そう気付いたころには周りは暗くなっていた。

【北海道文学館理事長賞受賞 一般部門より 青木典仁氏の作品「鯛の会」】

皆様、本日はお忙しい中、鯛の会にご足労頂き誠に有難うございます。

鯛の会は宗教法人でございます。最近では宗教と申しますと途端に眉を顰められる方が増えましたな。まあ、話を聞いて頂ければ他の方たちとの違いは理解して頂けるかと思えます。

皆さんは悩みや困ったことが起きた時、どうされますか。家族や友人に相談する、あるいは信頼できる方に相談を持ちかけることもあるでしょう。

でも、中には知り合いには相談しにくいこともありますよね。昔は、そういったことには宗教がよく相談に乗っていたものです。

よく知られたところではキリスト教の懺悔ですね。神に罪を告白することで赦しを請う、

一種の悩み相談です。仏教や神道でも神様仏様にお伺いを立てますし、占いなどもそうですね。

悩みを解決したり、告白することで心理的負担を軽くしたり。そう考えると、宗教は人々にとってなくてはならないものなのです。

ところが最近はお金儲けや反社会的行動に出る団体が出てきまして、宗教界全体が胡散臭い眼で見られるようになってしまいました。

そこで、宗教の持つ本来の機能を取り戻そうと設立されたのが鯛の会なのです。

この会は物を売ることは致しませんし、教義も一つしかありません。毎日鯛を食べる、これだけです。本当は鯛でなくてもよろしいのですが、鯛の頭も信心からということで鯛になっております。

鯛を食べて楽しい人生を。鯛を食べるだけで信仰になる宗教、現代人にはぴったりです。是非この機会に入信して頂ければと思っております。

何か質問はございますか。はい、では正面の方。

今日はお話を有難うございます。一つ質問があるのですが。

何でございましょう。

鯛の安売りはいつ始まるのでしょうか？

#### 【北海道文教大学日本語学科賞受賞作品 以下4編】

・高校生部門より 堺若菜氏の作品 「rainbow」

ふらりと入ったお店で見つけた魚は特別きらびやかで美しくはなかったけれど、透明の体の中央に横一線、虹色のラインが入っていて、しかも目は青かった。一目惚れして、一番虹色のくっきりしているのを買った。辞書のケースの様な硝子の水槽と、下に敷く青と水色と半透明の硝子の小石も買った。水草は葉が繊細そうで一番青みの強いのにした。出来上がった水槽は一枚の絵の様だった。穴をあけたラップを水槽に被せてもらい紙袋にそっと入れて店を出た。

本当は街で色々買い物していくつもりだったけれど、魚を夕方の混んだバスに乗せるのが嫌でそのまま帰ることにした。昼下がりの暖かな春の日だった。

バスに乗ると後ろのすいている方へ歩いた。魚に息苦しい思いをさせたくなかった。前の方には半分眠っている様な老婆や、騒ぎ立てている子供たちを叱っている母親や、休日出勤でぐたりとしている中年男性が座っていた。誰も私の方には見ていない。私はそっと紙袋を覗いた。気をつけて持っていたので水は漏れていなかった。ほっと胸をなでおろす。

私はこれから自分の部屋に帰るのだ。突然ぼろりと涙が落ちた。涙は水槽の上のラップにびたびた落ちる。そうだ私は傷心していたのだ。私はこれから、もう彼が来ることのない部屋へ帰るのだ。ラップの穴から涙は水槽に入り込み水にとけてゆく。この魚、海水魚だっけ？ そう思いながら紙袋を覗く。元気そうに泳いでいる。ごめんね。小声で魚に謝

る。可愛いやつだ。彼のように時々煩わしかったり、しばしば幻滅させられたりもきつとしないだろう。

部屋に着いて窓辺の綺麗に光の当る所に水槽を置いた。青い影ができる。影の中で動くきらきらした光はきっと虹色だろう。

私は携帯で水槽を撮る。そして書きかけのメールに添付した。失恋報告の傷心メールを消して。

・一般部門より 久保田秀幸氏の作品「3 minutes」

カップラーメンにお湯を注ぎ終えたと同時に、電話が鳴った。

「もしもし、早田さんのお宅でしょうか」

「はあ」

「突然ですが早田さん、ウルトラマンに興味おありでしょうか」

「ウ、ウルトラマン？」

セールス？ 普段なら速攻断るのだが、ウルトラマン…興味ありすぎ。でも何を売るつもりだ？ 話だけでも、聞いてみるか。

「まあ、人並み程度に…」

「そうですね！ 皆さん、控えめにそうおっしゃるんですよ。実は私ども、ウルトラマン変身サービスのデリバリーをさせていただいております」

「変身サービス？」

「はい。懐中電灯みたいな道具を使って、ウルトラマンに変身していただけます」

「マジで？」

「はい。ただし身長は変わりませんよ。巨大化すると、色々問題ありますからね。でも、力はそれなりにあります」

「安いの？」

「3分税込み8400円です。2分半を超えますと、カラータイマーが点滅して、3分超えますと、延長料金が加算されます」

「スペシウム光線だせたりするの？」

「はい、オプションでございます。ほとんどのお客様が使われますね。あとセブンですと、アイスラッガーが使えます、一枚5000円で」

「えっ、セブンにもなれるの？」

「はい。変身直前までなら、他のウルトラ兄弟に無料でチェンジ可能です」

「ふうん」

「いかがですか。今なら初回のお客様に、ポラロイド写真の無料サービスをしておりますが…」

「ううん、悪いけど、遠慮するわ。今、倒したいヤツいないし」

「…そうですね。じゃ、また機会がありましたら、よろしくお願いします」

僕は電話を切り、出来上がったばかりのカップラーメンをすすった。

・一般部門より 川俣チヨ氏の作品「貴方へ」

4月7日午前12時7分、64歳で旅立った貴方。あれから4ヶ月があつという間に過ぎてしまいました。当初は、ただただ泣きくれていた私ですが、この頃は、ようやく平穏な日々を過ごせるようになりました。

貴方が、育てたがっていたトマト、シロナ、パレイショなども、順調に育っていますよ！

本日、貴方の好物だったシロナと、あげのお味噌汁を、お供えました。みたま様になられた貴方、食べて戴いたでしょうか？ 一人で食べるご飯は、味気無くて、祭壇の前で何時も一緒に、戴いているのを知ってますでしょうか？ 貴方が居ないのは、本当に寂しくて、こんな人生設計は、全く考えていませんでした。今、携帯電話が鳴りました。チョット待っていてくださいね。旭川の長男からでした。今週の金曜日、海を見にこちらに来るそうです。彼は、あの日、周りの人が、なだめるのに苦労するくらいに、男泣きしました。彼もまた、36歳で父親と別れるなんて、考えられなかったのです。彼は、「サッカーを、もう一度親父と見たかった」と言って悔しがっています。

先日、初めて貴方の夢を見ました。戸口からちょっと顔を出して、ニコニコ笑っていました。たったこれだけでしたが、貴方の笑顔が、とても良くて、本当に楽しそうでした。貴方の顔を夢で見て、今までの生活が楽しかったのが解り安心したのです。貴方の年老いたお母さんは、元気です。きっと百歳まで大丈夫です。一番優しい子供から亡くなってしまったと言って、肺がんで、夫を失った私を慰めてくれます。

もうすぐ新盆です。私は、迂闊にも、貴方に携帯電話を持たせずに旅立たせてしまいました。お盆には、マリンプルーの私と同じ携帯電話を用意します。貴方、是非、ぜひ送り先を教えてください。

・高校生部門より 高木英輔氏の作品「わたし色のキャンパス」

鋭い笛の音とともに、誰かがすべり込んでくる。ホームの光が後退して、闇の中へと呑み込まれていく。私は、学校帰りの地下鉄の中にいる。先の見えないトンネルを見つめていると、いつの間にかガラスに映る自分の姿にピントが合っている。やつれた表情をして、胸には、スケッチブックを抱えている。ああ、今日も一枚もかけなかった。

電車が大きく揺れて、スケッチブックを落としてしまうと、大学生くらい男の人がそれを拾った。ありがとうございますと素気なく言って、受け取ろうとすると、彼が、

「この絵は君？」と言った。

「見ないで下さい。」

拾ってくれたのに失礼かもしれないけど、私はただ恥ずかしかった。その絵は、美術部に入って最初に描いた、自画像だった。

「君によく似ているよ。」

不思議に、からかわれているような気分にはならなかった。

「絵描くの下手なんです。」

「うん。とても不安そうな顔をしている。」

私の描いた自画像は、頼りない顔をこちらに向けていた。私はスケッチブックを閉じた。

「でも、絵を描くのが好きなんですよ。」

「えっ？」

「そんなに大切そうに抱えているから。」

次の言葉を考えている内に、遠くのほうに光を見つけた。

「君なら、きっといい絵が描けるよ。悩んで、苦しんで、自分を見つめ続けた上で、絵という物が生まれるんじゃないかと思うから。」

嬉しさと、恥ずかしさで、ありがとうと言って小さく笑った。

「いい顔してるよ。」

と彼は言って、地下鉄を降りていった。

鋭い笛が鳴って、またトンネルの中へと、吸い込まれていく。私はスケッチブックを開く。そこには、何も描かれていない真っ白なキャンバスが広がっている…。

## 参考文献

『きらら Qui! La! La!』2005年5月号 小学館

## 参考ウェブ

[pweb.mycom.co.jp/news/2005/01/011.html](http://pweb.mycom.co.jp/news/2005/01/011.html) 「PC WEB ニュース」

[www.itmedia.co.jp/survey/0404/28/svc10.html](http://www.itmedia.co.jp/survey/0404/28/svc10.html) 「ITmedia Survey ニュース」

[www.jri.co.jp/JRR/2005/09/st-payment.html](http://www.jri.co.jp/JRR/2005/09/st-payment.html) 野村敦子 『『モバイルペイメントの動向』要約』日本総研